

ガーナで法と現実社会との乖離が 実務体験をもとに国際弁護士をめざす

法学部 杉建陽一朗さん(東京学芸大付属高校出身)



「楽

りに感謝しています」と
杉建さんは、素直に中央大学での4年間を振り返る。入学当初から弁護士を目指していた杉建さんは、実務に関わりたいたの思いで、いったん司法試験の勉強から離れた。この間、

やる気応援奨学金を使って海外に飛び出し、「法」の実務に触れたことで、本当の目標を持つことができた。それは、新たな気持ちで司法試験に臨むことであり、国際弁護士への挑戦だった。

もともと弁護士に憧れていた杉

建さんは、1年生から炎の塔にある法職多摩研究室と白鴻会に所属した。「勉強はいつでもできる環境にあつたので、それなりに勉強していた」という。そして、1年生の夏休みの1ヶ月、米ミネソタ州のカールトン大学に語学研修のため短期留学した。

これが、その後の転機につながった。「この時、アメリカに行く勇氣がなかったら、その後、ガーナに行く勇氣もなかったと思う」と振り返る。3年生の夏休みに、やる気応援奨学金の今度是一般部門で2ヶ月間、アメリカのガーナでNGO活動をしたのだ。「司法試験から離れて勉強してみたい。実務に関わりたい」というのが動機だった。

杉建さんは、自らインターネットで調べ、イギリスに本部のあるプロジェクトアプロードという先進国の学生を途上国に派遣しているNGOに出会った。そして直接、NGOに電話をしてコンタクトを取り、法学部の三枝幸雄教授にも相談してガーナでNGO活動する計画を進めた。

「ガーナでの活動は、子どもの人身売買の現状を、子どもを売った親や救助された子どもから話を聞いてまとめ、それを法整備に役立てるための立法事実の一つとしてガーナの厚生労働省に伝えるというものでした」

ガーナでは人身売買を取り締まる

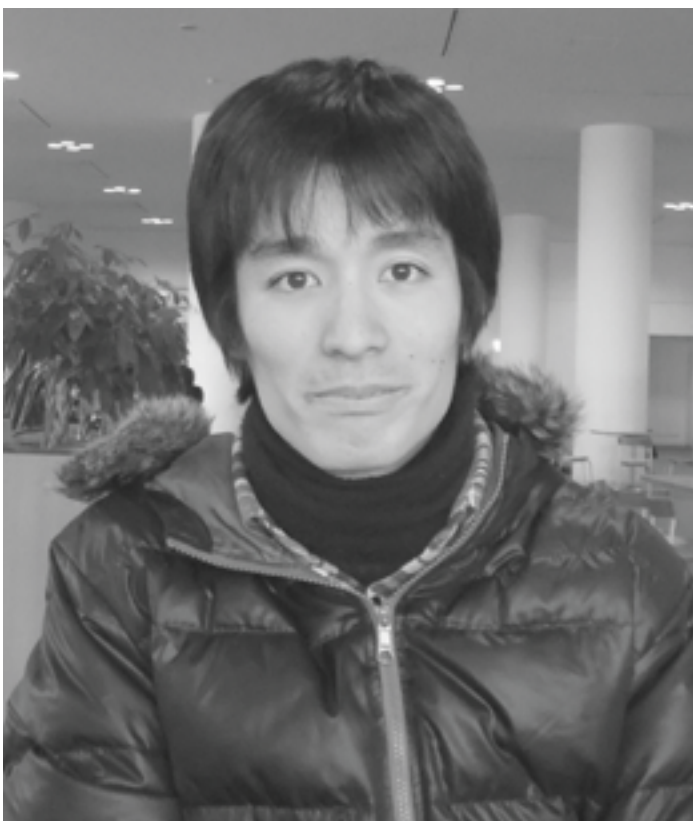
法律があるにもかかわらず、警察官がそれを守らないほど、法と現実社会が乖離している実情を目の当たりにした。「日本では普段、法律の存在をあまり感じないが、ガーナで改めて法律の存在を知った」という。

「海外に目を広げてみて、自分の考えの小ささに気付きました。社会にはいろいろな職業があつて、司法試験に失敗しても生きていけないわけじゃないと思つた」。自分の職業を自由に選べる視野の広さを持った杉建さんは、新たな気持ちで「もう一回、弁護士を目指そう」と考え、ロースクールへの進学を決め、勉強に励んだ。

この春、杉建さんは中央大学法科大学院に進学する。司法試験の勉強に専念し、その後「アメリカの大学院にも行きたい」という。目指すのは国際弁護士だ。

最後に先輩へは、「何かを通して、常に目標を見つけて成長して行って欲しい。今しかできないことにチャレンジして欲しい」との言葉を送ってくれた。

(佐武)



入学時から法曹界を目指して一直線 『炎の塔』などの学びの環境に感謝

法学部 谷田部峻さん(私立桐蔭学園高校出身)

大学4年間は、法曹界を目指し、慶応義塾大学法科大学院既習者コース、早稲田大学法科大学院既習者コースにも合格したが、当然のよう
が見事結実し、今春から、中央大学法科大学院既習者コースへ進学する。に中大ロースクールを選んだ。

谷田部さんは、生活に車椅子を使っている。明るく穏やかな語り口からは、そのハンディはみじんも感じられないが、「高校時代は名門野球部に所属していた」というだけに、負けず嫌いなのだろう。3つの大学のロースクールに合格したのも、人一倍勉強に励んだ結果だ。

「もともと漠然と法曹になりたいという意識はあった」と谷田部さんは言う。それが明確になったのは、指定校推薦で中央大学法学部政治学科に入学してからだ。

父親が中央大学法学部卒業という家庭環境もあったかもしれないが、橋本基弘教授の憲法の授業や、『炎の塔』で行われている法職講座で、永山在浩弁護士らの民法の講義を受けるうちに「法律を学ぶ面白さを知った」という。

1年生で法職多摩研究室に所属し、本格的に法律の勉強をはじめ、「最低限の知識で効率よく解く」ことを念頭に、六法の勉強に取り組んだ。

ゼミは、政治学科の学生の多くが政治系のゼミを選択する中で、谷田部

さんは、2年生で橋本基弘教授の「憲法」のゼミ、3・4年生では大村雅彦教授の「民事訴訟法」のゼミで法律を学んだ。

「1、2年生のときは、研究室のゼミが土曜・日曜にもあったため、ほぼ毎日、大学へ通っていました」という。努力の甲斐あって、4年次に旧司法試験・短答試験に合格した。

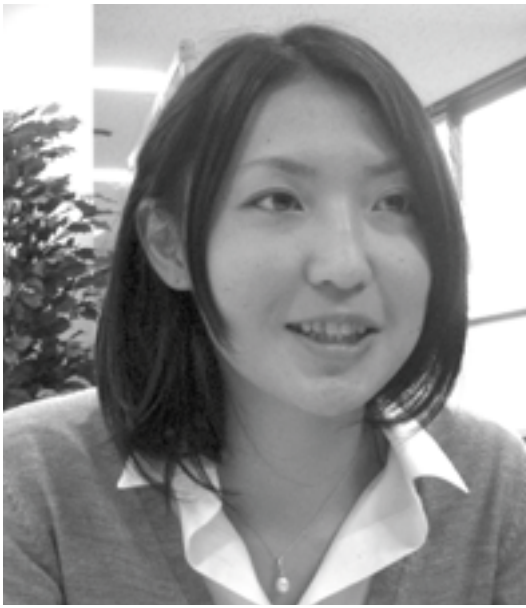
「でも、モチベーションが下がることは、やはりありました」と話す。そんな時は旧司法試験に合格し2つ上の尊敬する先輩に相談し、励ましてもらったそうだ。このような「先輩と先輩の縦の繋がりが中央大学の魅力のひとつです」と谷田部さんは強調した。

さらに加えて、「情報共有や試験対策ができる炎の塔や法職基礎講座などの学べる環境が、整っている。こども中央大学の魅力です」と述べ、法曹を目指す後輩たちにも、中央大学の学べる環境を十分に活用して欲しいとエールを送ってくれた。

(梶原)

やる気応援奨学金での体験が転機に 社会に触れ、生活範囲の狭さを知る

法学部 磯田芙美さん(神奈川県立厚木高校出身)



「法学部の学生なら、やる気応援奨学金をぜひ受けてください」。磯田さんは、こう強調する。というのも、自らの奨学金を利用して2度、海外を訪れたことが、大学生活を実りあるものにしたからだ。

磯田さんは入学当初から、男子

ラクロス部のマネージャーをしていた。朝早くから大学近くのグラウンドに集合し、選手と同様に練習に参加、多忙な生活を送っていた。しかし、大学4年間にもっといろいろなことに触れたい、知らない世界を見たいと思い、2年生の10月に退部した。

転機となったのは、2年生の夏に

1カ月ほど、法学部のやる気応援奨学金を活用してアイルランドと北アイルランドを訪れたことだった。「高校まで海外経験は全くないです。親にも1人で行くことを心配されました」というほどのチャレンジだった。最初の3週間は

アイルランドの首都ダブリンにホームステイをして、語学学校に通った。その後、12年前までカトリックとプロテスタントの間で紛争があった北アイルランドに入り、1週間滞在。「ユースホステルで寝泊まりして、各地の民間の調査機関をまわり、ミサにも参加しました」と北アイルランド紛争を肌で感じる事ができた。

この経験がその後の磯田さんの学生生活を大きく変えた。「帰国して、それまで漠然とあつた国際紛争や宗教への興味を確信しました。ちょうど専門演習の試験もあり、やるからには徹底的に勉強しようと思い、厳しい滝田賢治先生のゼミに入りました」。滝田ゼミは2年生の後期から週に1回、3時間続きのプレゼミが始まる。3年生ではゼミ長を務め、一層勉強に力を注いだ。

3年生の夏、今度はやる気応援奨学金の国際インターシップでインドを訪問した。「人や車が街に溢れていて、経済が成長しているというのとは違うことかと思いました」と日本にはないインドの熱気を体感

した。

4月からは医療機器関連会社の仕事に就く。「就活を通して自分の生活範囲がいかに狭いかがわかりました。就活では自己分析や、業界研究を行います。1人でやるよりもみんなで行う方が、自分のことを相対的に判断してもらえ、効率も良いです」と就活を振り返る。

こうした体験を活かし、友人らとキャリア支援チーム『TOP』を結成、4年生の秋に、就活を控えた3年生を対象に「自分自身と社会のつながり」をつくる企画として業界研究発表会を催した。この企画には4年生、OBも参加、無事に成功を納めたという。

後輩達に対しては、「今しかできないことを満喫してください。インターシップでも留学でも、なんでも良いです。ぜひ社会に触れてください」と強調。「中大のなかだけでなく、外にも良い出会いを探して欲しい。もちろん良い本や映画との出会いも大事です」とアドバイスを送った。

(萩原)

公務員の父に次いで総務省へ

ゼミ、インターンで実務体験を積む

経済学部 石神瑞己さん(私立静岡学園高校出身)

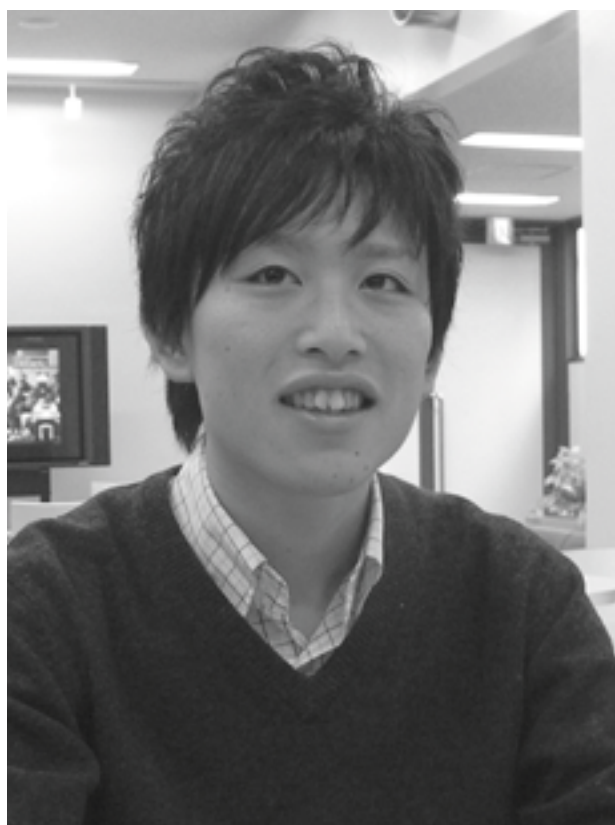
経

経済学部で学んだ石神さんの親族は、中央大学と縁が深い。

公務員という職業が身近に感じられた」という。

祖父は法学部政治学科卒で、かつて静岡県島田市会議員を勤め、叔父が文学部卒だ。また、父親が静岡県庁に勤めており、「祖父、父の影響で、

「勉強するために大学に入った」と強調する石神さんは、2年生の後期から地方自治が専門の佐々木信夫教授の演習(ゼミ)に所属し、経済



学部の各ゼミの中で、優秀な論文を集めた優秀論文集に選考された。「4年生の卒業論文を書き上げるまで、指導教授の佐々木先生に1対1で指導を受けることができ、本当に経済学部で学んでよかった」と振り返る。ゼミでの勉強を通して、公務員という進路がより明確になった石神さんは、資格試験予備校にも通うようになった。予備校では、「どうして、公務員になりたいのか。どんな公務員になりたいのか」という思いを日々持ち、勉強に取り組んだ。

3年生ではインターンシップコースにも参加し、国分寺市役所で実務を体験した。インターンシップを通して「大都市圏とそうではない地域の市役所では、住む場所によって可能なサービスが異なってしまう」ということを学んだという。

公務員試験までの勉強で、模試などでなかなか成果が出せず、周りの友達がどんどん就職先が決まってくななかで、焦りも感じたそうだし、か、「どうしても公務員になりたい」という強い信念」で全力を尽くし、

晴れて国家公務員の資格を得た。

石神さんは、今春から総務省に務める。旧自治省系で採用されたこともあり、「地域間格差を解消し、全国で柔軟な行政サービスを提供できるようにしたい。また市町村合併の総括や地方税制改革に取り組んでいきたい」と先を見据えている。

また国家公務員は、地方公務員と比べると直接、住民と接する機会が少ないため、「住民の意見を大事にし、それを国家行政に反映して奉仕できる国家公務員を目指す」と自らの「あるべき国家公務員像」を描く。

石神さんは、自らの「就活体験」を振り返り、「まず大学の授業をしっかり受講し、1、2年次では、将来の職業選択の幅を広げるためにも自分の可能性を発見できるように努め、何より経験を大事にして欲しい」と強調。「就活では、大学で『何をしてきたか』『何を得意してきたか』ということが重要で、経験で得たことが必ず、採用面接で役に立つはずですよ」と後輩達にエールを送った。

(梶原)

2度の留学で成長、自信つける サークル、バイトにも精を出す

経済学部 齋藤亮太さん(山形県立山形南高校出身)



「何でも真面目に頑張ってきた。留学だけではなく、アルバイトも頑張りました」という齋藤さんが、大学生活の4年間を振り返るにあたって、外すことが出来ないキーワードが4つある。

「何」でも真面目に頑張ってきた。留学だけではなく、アルバイトも頑張りました」という齋藤さんが、大学生活の4年間を振り返るにあたって、外すことが出来ないキーワードが4つある。

からが大変なイメージがあるが、「行くまでに苦労しました」と齋藤さんはいう。

「自分にはプレッシャーをかけて、留学したいという気持ちと気合」で乗り越えた。

「中大は勉強が出来る環境が整っていたし、多くの友達も出来た。キャリアセンターなどのサポートも充実していた」と、充実した大学生活を振り返りながら齋藤さんは、後輩たちに対し、「何かやりたいことがあったら結果に関わらず、時間やお金を使っても挑戦した方がいい」とアドバイス。さらに「友達を多く作った方がいい。友達の力があるから今がある」と強調した。

ただ、齋藤さんは、「留学だけが自分を成長させたわけではない」と話す。サークルやアルバイトにも力を入れ、そこで交友関係も広がってきた。

この春からは、国際物流の仕事に就く。ここでは、「専門で勉強してきたこと、英語を使って仕事に活かす」考えた。齋藤さんは、大学生活で得た自信を胸に抱きながら、社会生活の一步を踏み出す。

小学生から続けていたハンドボールを続けるため、大学1年生からハンドボール同好会に所属。週2回の練習をこなし、春と秋には大会に出場。また2年生からは、ESSにも所属し、留学に向けて英語力を磨いた。アルバイトで忙しい中でも、いかに充実した大学生活を送るかを常に考えてきたという。

(上田)

体験が自らを大きく成長させた4年間 積極的に挑戦し、コンプレックス克服

経済学部 橋口貴さん(私立桃山学院高校出身)



「何かやらないと」。橋口さんは、大学入学当初からそうした思いを抱いていた。「人前で話すことが苦手で、コンプレックスがあった」という。しかし、いまの橋口さんには、全くその面影はない。大学生活で挑戦を繰り返し、

そのコンプレックスを克服していったからだ。

5回、インターンシップに参加した。「他の学生と違うことを行ってみたい」と考え、最初に行ったイトーヨーカドーでは、「はじめは働くことに抵抗があった」ものの、数字に

表れた仕事の成果をみて、自主的に活動することの大切さに気づいた。「いかにお客様に商品を買っていただくか、と挑戦し工夫する過程に楽しみを見出し

た」という。

3年次には、経済学部のキャリアガイダンス運営委員の代表になった。代表にはすすんで立候補した。「今までリーダー経験がなかった」ため、「積極的に飛び込むことの大切さを感じていた」ことも後押しした。

キャリアガイダンスの活動では、就職活動を経験した4年生から話を聞いて、「就職活動は、社会人になるために、やらなくてはならないものですが、ただそれだけ、としかみなさないのもつたいない」と考えた。4年生の体験談から「就活は、自分を成長させることができる貴重な機会だ」と気づき、橋口さんは、『就職活動とは何か?』というテーマを掲げてガイダンスすることを提案した。

その運営にあたっては、機械的に割り当てられた仕事をバラバラに進めていることに危機感を持ち、代表としてメンバーをまとめる工夫をした。運営委員は、それぞれ活動に参加した動機も目標も違うため、メンバーと対話を重ね、運営委員が成長

できる場にしようと広報活動に力を入れた。それが実り、ガイダンス当日は目標にしていた250人を大幅に上回る400人以上が集まった。

4年次には、『高校生が夢や目標を持てる場を提供する』をコンセプトにした学生団体を立ち上げた。「自分が一番影響を受けたインターンシップ」の機会を高校生に与え、社会経験を積んでもらおうという活動だ。橋口さんが大学生活で考え、行動して学んだことを後輩たちに還元しようというわけだ。

「臆病で繊細」と自らをそう分析する橋口さんは、大学生活を振り返り「最低ラインからのスタートでした」と笑う。大学4年間のさまざまな活動を通し、「経験すれば、人それぞれの苦労もわかるようになり、相手の話にも共感できる」との教訓を得た橋口さんは、卒業後はインターンシップで積極性が大切なことを知ったイトーヨーカドーに就職。「頼られる存在になりたい」との目標を掲げ、新たな挑戦を続ける。

(渡辺)

全日本卓球の混合ダブルスで見事初優勝 主将として部をまとめ、成長した精神力

経済学部 瀬山辰男さん(私立青森山田高校出身)



「まさか優勝できるとは思っていなかったなので、びっくりしました」と素直に初優勝を喜ぶ。その表情に高揚感はなく、口調はいたって穏やかだ。

瀬山さんは、1月に行われた全日本卓球選手権大会の混合ダブルスで、坂本夕佳さん(文学部3年)とコン

ビを組み、見事初優勝した。全日本選手権の混合ダブルスで、中央大学の学生ペアが優勝したのは初めてという快挙だ。

決勝の相手は、前年覇者の松平健太(早大)、石川佳純(ミキハウスJSC)組の強豪ペア。松平、石川両選手は、いずれも男子、女子シングルス

を制した日本チャンピオン。瀬山さんが「優勝はまったく考えていなかった」というのは、もともとだが、試合は「勢いにのっていた」という瀬山・坂本の中大組が3セット連取するという「完勝」だった。

瀬山さんが坂本さんとのコンビを結成

したのは、昨年10月。大会までの練習期間は短かったが、中大卓球部の先輩・後輩だけに、密度の濃い練習はできた。練習でも試合でも1年先輩であり、全日本学生の男子ダブルスで2連覇した瀬山さんが、坂本さんをリード。決勝でも、女子シングルス2回戦で小学4年生に敗れ、落ち込んでいた坂本さんを瀬山さんが、「気持ちを切り替えて戦おう」と励まし続けた。

「両親が卓球の指導者という環境で育った瀬山さんは、物心ついたときから卓球をしていた。中学、高校は親元を離れ、青森県の卓球強豪校で寮生活。「高校時代は周りが強い人たちばかりで、団体戦でも『自分がどうしても勝たないと』という意識はあまりなかったです」という。中央大学への進学は周りのアドバイスで決めた。

「大学生活では、技術的にというよりは精神的に成長したと思えます」と謙虚に4年間を振り返る。「もともと自分だけで、『試合に出たい。勝ちたい』と思うほうではないので、

シングルスよりはダブルスが好き」という。ただ、大学での競技生活で、積極的に「強くなろう」と考えるようになった。「一番成長したと感じるのはその点です」と自己分析する。4年生になり、キャプテンになったことで周囲をみるようになった。それまでは「上の代(先輩)に恵まれていたので、自由にやらせてもらっていた」が、卓球部をとりまとめる責任を負ってからは、「周りを強くするために、どうしたら良いか考えるようになった」。

卓球部の部員間のつながりは強いなかでも同期生の存在は大きく、「同期がいなかったらここまでできてなかった。勉強でも生活の面でも助け合ってきたので、何でも話せて、一生付き合える仲です」と感謝する。瀬山さんは、卒業後は一般企業に入社、卓球部に所属して社会人選手として競技する。ただ、今までのように卓球だけに専念するのではなく、将来を展望し、「仕事をメインにして働く」と新しい生活を見据えている。(渡辺)

計画を立て、実行に移した4年間 現場を見て、人と接し、見聞広める

商学部 古川浩章さん(私立桐蔭学園高校出身)



「アルバイトで資金を集めて、
大学2年でヨーロッパを
一周。3年、4年では海外に留学を
する」。古川さんは、入学当初か
らこのような計画をたてていたとい
う。そして、その通りに実行した。「計

画をたてて、実行するのが自分の性
分です」と明るく笑顔で語る。

まず、「入学してからアルバイト
で100万円ためた」。それを元手に
大学2年の夏に40日間かけて、ヨー
ロッパ一周の1人旅に出た。「もつ

と視野を広げる
ことが重要だ」
との思いから
だった。

旅では、「安
いホテルに泊ま
ることができれ
ばいい方で、ほ
とんどが野宿。

一日の食事がリ
ンゴ1個の時も
あった」。ヨー
ロッパを一周し
て「自分の考え
の狭さになさけ

なくなつた。旅先で色々な国の人と
話して、世の中には素晴らしい人が
いっぱいいて、もつと世界に人脈を
広げたい」と強く感じた古川さんは、
「大学時代にもつと行動力を広げて
いこう」と考えるようになったとい
う。

次に3年の時に海外留学した。留
学先には、イギリスのロンドン・ス
クール・オブ・エコノミクスを選ん
だ。8歳までイギリスに住んでいた
古川さんは、幼少時代をすごしたイ
ギリスで勉強しようと思つたからだ。

ロンドンでは、現地の大学で金融
や企業のマネージメントを学んだだ
けではなく、語学の勉強にも多くの
時間を割いた。今では「英語で細か
いビジネスマン交渉ができることを
目指している」というまでに英語力
を磨いた。

そして、今度は4年になって、商
学部の『チャレンジ・スカラシップ』
を使って北京大学に留学した。「49
カ国の人がいて、みんな、授業で
の真剣さが日本とはまるで違った。
分かるまで質問をして、学ぶことに

貪欲。留学生のなかには、50歳くら
いのビジネスマンもいた」と話す。

古川さんは、留学した大学で学ぶ
一方、精神的に行動した。ロンドン
では現地企業にインターンシップし
たり、北京では『万里の長城』を1
週間で制覇したりしたという。「誰
にもチャンスは平等だと思つていま
す。行動すれば絶対にチャンスがあ
つてくる。行動に意味があるかどう
かを考えるのではなく、実際に足を運
んで現場を見るのが重要だと思
う」。

こう語る古川さんは、FLP国際
協力プログラムの緒方俊雄ゼミの活
動では、ラオスに行き、現地の大学
生や日本の企業とともに900本の
植林を行なった。

「今後も、国際的に通用する力を
身につけたい。出会いを大切にして
世界に人脈を広げたい。そのため
にもつと見聞を広めて、多くのこと
を吸収しようと思う」と古川さん
は、さらに先を見据えた計画を心
に描いている。

(豊福)

アクティブに行動するをモットーに 出会いと体験が社会・世界観を広げる

商学部 山本千恵子さん(私立千葉英和高校出身)



「自分からアクティブに行動していくことです。大学生活で心掛けたことは？とうかがって、即座に返ってきた答えが、これだった。「大学では、たっぷりある時間を有効に活用してできるだけ多

くの人と出会い、交流を深める。そして色々な経験を積むことでした。」
大学生生活をおくるうえで山本さんのモットーは、「行動し体験する」と明確だった。第一志望の中大にはAO入試で合格。2年生から教職を

取りはじめ、1限から7限まで授業があるという毎日を送っていた。そんな中、教職の講義のゲストティーチャーであった中学校の教師から、女子バスケットボール部コーチのボランティアを紹介される。小・中・高で8

年間培ってきたバスケットボールの経験を生かし、紹介された中学校でのコーチのボランティアを2年生の後半から始めた。

「生徒たちに教えるというのは初めてで、貴重な経験でした」というこのボランティアで得た教訓は大きかった。「社会に出たら様々な世代の人と関わることになるから、学生のうちから幅広い世代の人と関わって、コミュニケーションを取れるようにしておくことが大切だと感じました」というのがひとつ。また、「中学生の気持ちになって考える場面も多くなり、そのことは自分の価値観を広げることにも繋がりました」という。

3年の夏休みには、中大に留学しているミャンマー人の友人と一緒にミャンマーへ旅行し、現地の人と交流した。「ミャンマーという国に触れて自分と違った立場の人がいることを知りました」。ここでも、人との出会いを通し、異文化に触れることで、山本さんは世界観を広げた。3年秋からは、本格的に就職活動

を始めた。「人と関わるのが好きで、人の話を聞くのも好き」というだけあって、就職先も営業職に絞り、4年生の5月にはJ.R.東日本商事の営業職に内定を得た。「就職活動では大学生活で自分がやってきたことについて自信を持って、自分の言葉で語ることが大切だと実感しました」という。

就職直前の今年3月下旬、学生時代に培ってきた人脈をもとに、語学力を磨くためシドニーへ2週間ほど短期留学。この留学が実現したのも色々な人との出会いがあったからこそだった。「出会いの数ほど人生豊かになるといいますが、大学生活でまさにその通りだと学びました」と強調する。

「学生時代から社会に目を向けて、興味のあることに自分からアクションを起こすことが大切。経験したことは、そのまま自分の価値になり、就活でも強い味方となってくれるはずです」という山本さんのメッセージには、自らの体験に基づいているだけに力強さがあった。(熊谷)

経験活かし、チアのサークル立ち上げ 優勝し、ハワイに招かれ試合で初披露

商学部 藤井佳織さん(中央大学附属高校出身)



昨年12月、藤井さんは日本とハワイの学生交流のため、約1週間、ハワイに滞在。現地の大学のアメリカンフットボールと、バスケットボールの試合の応援に参加し、初めて応援のチアを披露した。

「この時がはじめて、スポーツの試合で踊るチアでした。今までは、ダンスのみでしたが、本来のチアを意味するスポーツの応援でのチアの醍醐味も味わうことができました」

藤井さんが、大学生活で取り組ん

だのが「ソングリーディング」という競技だ。ソングリーディングは、チアリーダーから派生した競技で、チアリーダーングでみられる組み体操などのアクロバティックさよりも、ダンスが専門で、

ヒップホップからジャズまで幅広いダンスが競技に取り入れられている。

幼い頃からバレエや新体操を習っていた藤井さんは、大学1年生の頃は、経験を活かして、新体操クラブで小さい子に新体操を教えていた。そして、2年生の春、中大附属高校の後輩とソングリーディングサークル『Garnet Girls』を立ち上げた。

発足当初、10人ほどの部員が集まったが、未経験者が多く、附属高校時代からの部活のコーチを招き、メンバー同士でもお互いを見合いながら活動がスタートした。

「新しいサークルだったので前例もなく、最初は大変でした。それに2年生は私1人だったので、1年生とコミュニケーションの取り方に少し戸惑いましたが、年上だからと気にせず同期として1年生と接していました」

そんな苦労もあったが、「みんなが上手になっていくのが感じられて、やっていて楽しく無我夢中の日々でした」と当時を振り返る。

初めて競技大会に出たのは、2年

生の11月。結果は「下から数えた方が早かった」という。しかし、次の幕張メッセで行われたチアリーダーング・スポーツ普及団体USA(ユナイテッド・スピリット・アソシエーション)主催の大会では、地区予選から全国大会へ勝ち進み、ファイナルまで進んだ。

その後も好成績を残し、昨年に有志団体から学友会傘下のサークルとして認められた。

同時に8月に行われた全国大会で、見事に優勝。その結果、大会を主催したUSAの団体からの誘いで、12月にハワイに赴き、チアを披露したのだった。

藤井さんは、4月から都内の銀行に勤務する。最後に「大学時代にはやりたいことをできるチャンスも時間もありません。私は、Garnet Girlsの仲間と出会い、信頼し、成長できる良い関係が築けました。思いやるということをこんなに感じたことは初めてで、仲間と数え切れないほどの思い出は私の一生の宝物です」と後輩達にエールをおくった。(豊福)

アメフトマネージャーに懸けた4年間
自分で考えれば、やれることは無限大

文学部 宇野澤祐菜さん(神奈川県立鶴嶺高校出身)



大ベストセラーとなった単行本を受け、漫画やアニメ、今度は映画にと「女子マネージャー」が注目されるなか、宇野澤さんは、大学4年間をアメリカンフットボール部のマネージャーの活動に懸けた。

高校時代はバレエ部に所属し、選手として活躍したが、引退後、選手以外で自分が必要とされるポジションを探そうと、「プレーはできなくても私にできることがきつとある」と、マネージャーに興味を湧いたという。

アメフト部マネージャーの活動に飛び込んだのは、マネージャーの教育がきちんとしていたからで、入部のきっかけを「感覚です」と語る。入部当初、「何をするのか全く知らなかった」というマ

ネージャーの仕事は、驚くほどに多岐に渡っていた。試合のビデオ撮影にはじまり、ホームページの作成・運営、応援グッズの製作、チームの紹介冊子づくりなど実に幅広い。

時には、活動の場はグラウンドを飛び出した。サポーターや選手の保護者へのインタビュ、広告スポンサー探しにまわるなど大学外の社会人と関わる機会も多く、「コミュニケーション能力が身についた」と活動を振り返る。

なかでも、力を入れたのは、3年生から責任を担ってきた「ホームページの作成・運営」だ。パソコンを使ったこともない状態からはじめたが、製作しながら次第にノウハウを身につけていった。創意工夫を凝らしたページには、「アメフトを多くのの人に知ってほしい」という宇野澤さんの思いが形となつて表現されている。「ホームページをみて興味を持ち、入部してくれる人もいる。情報を発信するだけではなく、ホームページはひとつの繋がりでもあるんです」と思い入れを語った。

『愛されるチーム』が中大アメフト部の目指すチーム像だ。「関東制覇」「日本一」という目標を掲げ「勝ち」に強くこだわらる。

「選手がVICTORYの『勝ち』なら、マネージャーはVALUEの『価値』。あなたたちにできることは価値を上げること。『勝ち』と『価値』のベクトルが合つてこそ愛されるチームになる」。マネージャーコーチから、こう教えられたことが、強く印象に残っているという。

「勝ちたい気持ちと周囲の環境、全てが上手くはまってくれたからやつてこられた。本気で頑張る仲間と切磋琢磨したこと、そして毎日を支えてくれた周囲の人々へ、本当にありがとうという気持ちです」と笑顔で話す。

「自分で考えて自分で行動すれば、やれることは無限大にある。なにをするにも限界はないと思う」と後輩達に力強くメッセージを送る宇野澤さん。チームの夢がかなう日を、グラウンドの外から楽しみにしている。

大きく成長した1年間のフランス留学 世界に目を向け、国際人への道を歩む

文学部 樋口詩織さん(宮崎県立都城泉ヶ丘高校出身)



「『オペラ座の怪人』が大好きだったことがきっかけで、フランスに興味を持ちました」という樋口さんは、高校生の時からフランス留学を夢見ていた。高校時代に2週間滞在した時、言葉でとて

も苦労した経験から、大学では特に力を入れてフランス語の勉強に励み、3年生の夏から1年間、交換留学という形で夢を叶えた。「フランスは憧れの国だったけど、実際に1年を過ごしてみると苦勞

もたくさんあった」という。ただ、留学で苦勞を体験して以来、「よく感謝するようにになりました」と気持ちの変化を語る。フランスでは、大学に通いながら寮生活を体験した。「何かトラブルがあったらフランス語で伝えなければい

けないため、甘えが無くなった」と自身の成長を実感し、「多国籍の友人ができた」と掛け替えのない時間を過ごすことができたことを素直に喜ぶ。

大学では、生徒が能動的に動いて創りあげていく授業スタイルや、フランス人の学習意欲に、多くの刺激を受けた。なかでも「原爆」というテーマでプレゼンをした経験は印象深く残っているという。

「質問が出たときは、自分のフランス語を理解してもらえたと実感できて嬉しかった」と振り返ると同時に、「『原爆のことを今の日本人はどう思っているのですか?』との質問は忘れられない」と話す。「戦争は繰り返してはいけない。原爆のことを私は詳しく知っているけど、よく知らない若い人もいると思う」と樋口さんは答えたという。

活発な議論の中、ブラジル人留学生が「事実を日本の若い人達知ることが必要だよ」とアドバイスしてくれたことがとても印象的だったと振り返る。

フランスは移民が多く、多人種国家でもある。そのために「外国人というだけで冷たくされる」ことも体験した。「人種によって偏見や先入観があることを、身を持って実感した」と樋口さんは表情を曇らす。

「特定の民族を色々非難して言うけど、実際、友達になってみると、全然そんなことはない」と分かる。聞いただけで決めつけるのはよくない。聞くだけでなく、きちんと自分の目で見るのが大事」と強い口調で語った。

就活のために留学に足踏みしながら大学生の現状について樋口さんは、「自分と違う考えに触れて視野を広げること。そして寛容さは生きていく上で大事です。グローバル化というなら、日本人はもっと外へ出て行くことが大切」と世界へ目を向ける価値を強調した。

「将来はグローバルに活躍できるような人になりたい」と大学院への進学を志す樋口さんは、国際人への道を新たに歩みはじめた。(三島)



「先生になる」「夢に一直線の4年間」 「経験」と「仲間」の大切さを知る

文学部 菊地祐太さん(私立拓殖大学第一高校出身)

とにかく笑顔がいい。「計画性
があまりなく、興味あること
をとりあえずやってみる人間だから
失敗することも多い。そんな僕にい
つも手を差し伸べて応援してくれた
周囲には本当に感謝している」と話
す間もやはり笑顔だ。

日本史学を専攻した菊地さんは、

2010年10月に東京都の教員採用
試験に合格。中学・高校社会の3分

野(中学社会・高校地歴・高校公民)

に簿登録され、中学時代からの夢

だった「先生」になる資格を得て、

大きな一歩を踏み出すことになった。

そもそも中央大学は、「教師にな

れる大学」として選んだという。大

学4年間は、大学予備校の塾講師を
することで、受験生に対する教え方
を勉強するとともに、「自分自身の
学力を維持する」ことに役立てた。

ボランティアとして参加した中学

生対象の授業では、「生徒参加型授

業を行うためには、その始め方に特

に工夫が必要」と学んだ。旅行に行

くときは、必ず図説を持っていき、

歴史の授業に自分の経験を生かせる

よう心掛けた。

教育実習では、①開門から閉門ま

で学校にいる間は教室にずっといる

②クラスの生徒一人ずつに挨拶する

ことを自分に課した。長い時間教室

で過ごし、生徒との交流を大切にし

たことで、「先生になるという夢は

自分だけのものじゃない」と実感し

たという。

その一方で、ラグビーサークル

『ブルーウィンズ』でプレーした。

3年次に副キャプテンと主務を務め、

「チームを支える責任感と仲間のつ

ながりの大切さを知った」。

教師まっしぐらの大学生活の中で、

3年次の冬の2か月間、「ずっと行

きたかった」というフランスに留学
した。「ただ、周りは就活をはじめ
ていて、時期は悪かった」と苦笑い。

「フランスで過ごしてみても、自発

的に行動しないと周りは何もしてく

れないことがわかった。留学で、教

員免許取得を目指す勉強会への参加

は遅れてしまったけれど、危機感を

感じていた分、効率的に勉強できた

と明るく話す。

菊地さんは、大学生活を振り返

り、「もつといるんな場所へ行きた

かったし、大学での勉強をもう少し

頑張っておけばよかったと思う。だ

から完璧ではなかったけれど、やり

たいことをやってそれなりに忙しく、

満足できる4年間だった。自己採点

は75点かな」とこども笑顔をみせ

た。

「広島で過ごした中学生活が楽し

かった」ことを思い起こしながら、

今春、菊地さんは、目標である「様々

なタイプの生徒の個性を伸ばすこと

ができる先生」になるため、新しい

生活に踏み出す。

(中野)



7種競技で勝ち取った学生日本一 ケガとの闘いを支えてくれた仲間

文学部 山田めぐみさん(明大付属中野八王子高校出身)

身

身長178センチのすらりとした長身で、スタイル抜群。い

かにもバネがありそうにみえる。ところが山田さんは、「陸上の選手にはバネ系と馬力系があると思います。私は馬力系です」と自分自身の特性を紹介した。それもそのはずで、

山田さんは昨年9月に国立競技場で行われた第79回日本学生陸上競技対抗選手権大会(インカレ)の7種競技で見事優勝を飾った。

7種競技は、100mハードル、200m走、800m走、走り高跳び、走り幅跳び、砲丸投げ、やり投げの

7種目を総合点で競う競技で、当然バネばかりでなく、馬力も求められる。山田さんはその両方を兼ね備えているからこそ、学生チャンピオンに輝いたのだろう。

大学3年までは、100mハードルの選手でトラックが専門。フィードル種目は、骨折して走れなかった時に、高橋賢作監督から言われてやった程度だった。それが、女子陸上部で年1回行う7種競技会でフィードル種目でも活躍したのが高橋監督の目にとまり、7種をやるように勧められた。それがきっかけで、「少しでも記録を出して部に貢献したかった」と7種競技をはじめた。練習はハードだった。7種目を練習するので、練習時間はどうしても長くなる。1日7時間の練習は当たり前。「陸上競技場の夜間照明が消えて、はじめて夜9時だと気づくこともあった」という。

7種競技をはじめてからの競技歴が浅いため、トップレベルに追いつくのに必死で、「時間がなくて、嵐のように時間が過ぎました」と振り

返る。練習休みは週1日で、山田さんは、練習と学業との両立が大変ななか、教職課程も履修した。

1年生のときには疲労骨折で、1年くらいまとりに走ることができなかった。大学の競技生活はケガとの闘いでもあった。そんなとき、多くの人に支えられた。「かけがえないのは部活の仲間たちで、一人では陸上を続けられなかった。つらかったけど幸せでした」と友人、そして監督、コーチ、先輩、両親らに感謝する。座右の銘は『為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり』。「とくに大学生活で後半部分がわかるようになりました。何事も気の持ちようだって思うようになったんです」と話す。

卒業後はキャビンアテンダントとして働くことになり、陸上競技からは離れる。「走りきりましたから」とすっきりした表情だ。今は、「お客様がフライトで快適に過ごしていただけのように精一杯努めたい」と機上での仕事に思いを馳せている。

(渡辺)

「学業100%、遊び120%」が生活信条 商社で、2度のアメリカ留学体験活かす

総合政策学部 會田武史さん(私立成城学園高校出身)



「**総** 総合政策学部は画一的、単一的な学問を学ぶのではなく、政治学、社会学、経済学など幅広い問題を学際的に学ぶことができる」という會田さんは、入学当初から明確な目的意識を持っていた。総合政策学部の「グローバルポリシーが自分の目指す方向性に合致した」という。

1年生では、経理研究所の日商簿

記コースを受講。他方、体育連盟の陸上競技部にも所属した。授業、経理研、部活にと、教室とグラウンドを行き来する日々を送った會田さんの生活信条は「学業100%、遊び120%」だ。

1年生の夏、グローバルビジネスリーダーになるという明確な目標を定め、米カールトン大学に短期留学した。初の留学体験で「意外といけるな。英語はツールではないので、伝えたい気持ちがあればいくら英語が拙くてもコミュニケーションンでできる」と手ごたえを感じた。

2年生の9月からは、米アリゾナ大学にビジネスを学びに1年間、交換留学した。「土曜、日曜以外は、毎日約3時

間の睡眠で勉強に取り組んだ」。ただ、学業だけでなく次世代のビジネスリーダー育成のための教育機会を提供する国際的NPO『SIFE』に所属するなど課外活動にも積極的

に組み組んだ。現在は、日本にある『SIFE Japan』のプログラム・マネージャを務めている。留学課程が終了した後、カリフォルニアの広告代理店でインターンをした。そのために事前にビザの延長申請をしていたが、何度も不受理通知を受けた。それでも諦めず「現地企業でインターンをするためにアメリカに来た」と3カ月間粘り強く交渉した結果、アリゾナからカリフォルニアに向けて出発する日の朝になって、やっとビザの延長が許可された。この経験で「絶対に諦めないことを学んだ」という。

また、アリゾナで冠水、カリフォルニアで停電を体験し、「次世代インフラの事業展開を実現できる商社に入り、日本を世界に発信したい」と考えるようになった。そこで、某大手総合商社のインターンシップに

今春から三菱商事で働く會田さんは、「就活では、これまでの経験と、その経験によって紡ぎ出された。どうしてもその会社で働きたいという熱意」を相手に伝える事が重要です」と強調するとともに、OB・OG訪問などを通して得られた「人と人の繋がりが重要」とも語った。そして後輩に「八王子子という辺境の地から、学校外に出て課外活動をして刺激を得て欲しい」とエールを送った。

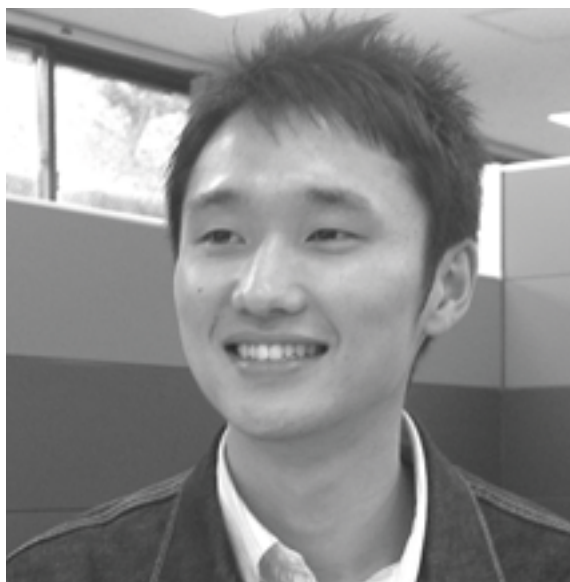
米国から応募し、帰国した翌日から新規事業プランを考える2泊3日の合宿形式のインターンシップに参加した。

會田さんは、就職活動では、就職情報サイトには一切登録せず、できるだけ多くOB・OG訪問をして現場の人の声を聞くようにした。2月には上海の商社駐在員にアポイントを取り、直接会いにも行った。「そこでエントリーシートについて厳しい指摘を受け、自分を見直し、気持ちを切り替えるスイッチになった」という。

(梶原)

やりたいことをやり通した大学生活 今度は専門紙記者として海外取材を

総合政策学部 倉持慶一さん(私立鎌倉学園高校出身)



「中

途半端は好きじゃない」。こう断言する通り倉持さんの学生生活は、留学はじめ、ゼミやサークルで、やりたいことをしつかりとやり通した「5年間」だった。

2年生と3年生の間の1年間、休学をして、オーストラリア・パース

の語学学校へ留学した。「英語力を身につけたかったから」と目的が明確で、休学という決断を下すのも苦勞はしなかった。

国際社会に関心を持ったのは、高校時代の1ヶ月間、アメリカでホームステイしたことや、総合政策学部

でオーストラリア人の先生の英語の講義を履修したことがきっかけになった。「大学で学ぶより、語学学校で少し気楽に学ぶ方が、自分には合っていたと思う」と懐かしそうに留学生生活を振り返る。

大学2年次からは、「留学生と交流できるのは面白そうだ

なあ」と、友人の紹介で留学生との国際交流サークル『SPUTNIK』（スプートニク）に所属した。留学生を空港で出迎えたり、アパートへの入居を世話したり、大学と一緒に食事をするなど、留学生と関わってきた。セルビアからの留学生と一緒に、セルビアのお菓子を作り、学園祭で販売したり、地元・八王子市の中学校へ国際交流の授業をしに行ったりしたこともある。

学部では、「文献をあたるようなゼミではなく、実践を重視するゼミに魅力を感じた」と理系を専門とする平野廣和先生のゼミに所属し、水質調査や実験などを通して環境について学んだ。

ゼミでは、多摩キャンパスの中央ステージ下にある池の水質調査を行い、水が汚れる原因や過程を調べ、清掃コストを下げるための政策提言を大学に行った。その結果、それまでは薬剤を使わないとしていた大学が、薬剤を使った池の管理を許可するという成果を挙げることができた。

4月からは、社団法人・日本電気協会が発行する電気新聞の記者として働く。昨年7月中旬まで就職活動

を続け、周りより少し決めるのが遅かったが、電気新聞では、留学やゼミの活動を伝える中で、飾らないありのままの自分を評価してもらえたという。

「もともとマスコミに興味があったので、記者という職業が楽しみ」と話す。専門紙の記者として「発電所や電気自動車などの専門分野を扱う不安もある」というが、先輩記者から「専門用語は入ってから、取材を重ねて学んでいけばいい」といわれ、少し気を楽にしている。

趣味は小学生から始めたピアノ。今も、バイト先のレストランではディナータイムに披露することもあるという。何事にも真剣に取り組んできた倉持さんは、時間の使い方が学生生活の充実度のカギを握る大学生にとって、お手本と言えるだろう。「記者になったら、留学で身につけた英語力を活かして、国際会議の取材をしたい」と次の目標に早くも目を向けた。

(石川)

小さい頃の夢だった中学校の教師に 将来は数学教育全体に関わる仕事を

理工学部 関根将志さん(埼玉県立川越南高校出身)



理

工学部数学科で学び、教員試験を突破した関根さんは、今春から念願だった中学校の教師になる。数学科では教職を取る学生が多いが、実際には「教員ではなく別な

仕事に就職する人が多い」なかで、関根さんは、入学以来、終始一貫して教師を目指してきた。

関根さんが「小さいころからの夢だった」関根さん。他の職業に就く気持ち

このブレは、

これまで一切なかった。逆に、『なぜ教師を目指すのか』と聞かれても明確な答えが出てこないくらい、自分では教師を目指すことが当たり前になつていた」という。

教師へのこだわりは、思

い返してみると、一人の先生との出会いだった。高校の時の体育の先生であり、所属していた野球部の顧問でもあった先生との出会いが、運命のはじまりだった。

父親の影響を受けて始めた野球で関根さんは、高校時代にいろいろなことを学んだ。その先生の野球に対するモットーが、『技術よりも精神』という考え方で、それに非常に影響を受けた」と振り返る。そして、先生に教えられた礼儀作法や挨拶は今でも関根さんの体に染みついており、「社会人になる上で、とても大事なことを教えてくださいました」と実感している。

関根さんは、中学の教師になつたら「是非、野球部の顧問になつて、自分が野球部で学んだものを生徒たちに教えたい」と思っている。

また、人に教えることの醍醐味を、アルバイトを通して体験した。大学1年から2年にかけてアルバイトしていた塾で、一度だけ生徒に怒つたことがある。その時は、怒つてしまつたことに申し訳なきを感じていた関

根さんだったが、その生徒が合否の報告を一番に自分にしてくれたのを知つて、慕つていてくれたのだと実感した。

この経験から、「時には怒ることも必要で、教える側が真剣であれば、それは相手にも伝わるということを学んだ」という。

関根さんは、「将来は数学教育の全体に関わっていきたい」と考えている。そのためには、まず中学の教師として数学教育の現状を把握し、その後、高校の教師になつて数学の専門的な教育を体験し、最終的には数学の教育全体をみるような役職について、数学教育を見直していきたいと考えている。

関根さんが大切にしている言葉は、「感謝」。両親はじめ先生、仲間があつてこそ自分だと感じているからで、「良い環境を与えてくれた中央大学にももちろん感謝している」。これからも周囲への感謝の気持ちを忘れずに、中学校教師として社会人生活のスタートを切る。

(橋本)